





しい。

おれは、ペコリと首をすっこめて、肉の上にいっぱいくっついてる塩を、皿の上ではらいおとした。小さな壺いっぱいの塩でも、兎の毛皮四枚もださなければ、岬の者たちは交換してくれない。そんなことを考えると、ばあさまのごごとももつともだ。

おれは、油のいっばいにじみでた鹿肉にしゃぶりついた。

「タロ、このモグラ、どこでつかまえた？」

ばあさまがきいた。

「うん、裏の茂みだ。」

「ほう、そうか。そろそろ、気候がよくなって、モグラのやつも、土の中からでるんだな。」

ばあさまは、石の皮はぎで、手ぎわよく、スウ、スウと、モグラのおなかのあたりから、皮をはいでいく。

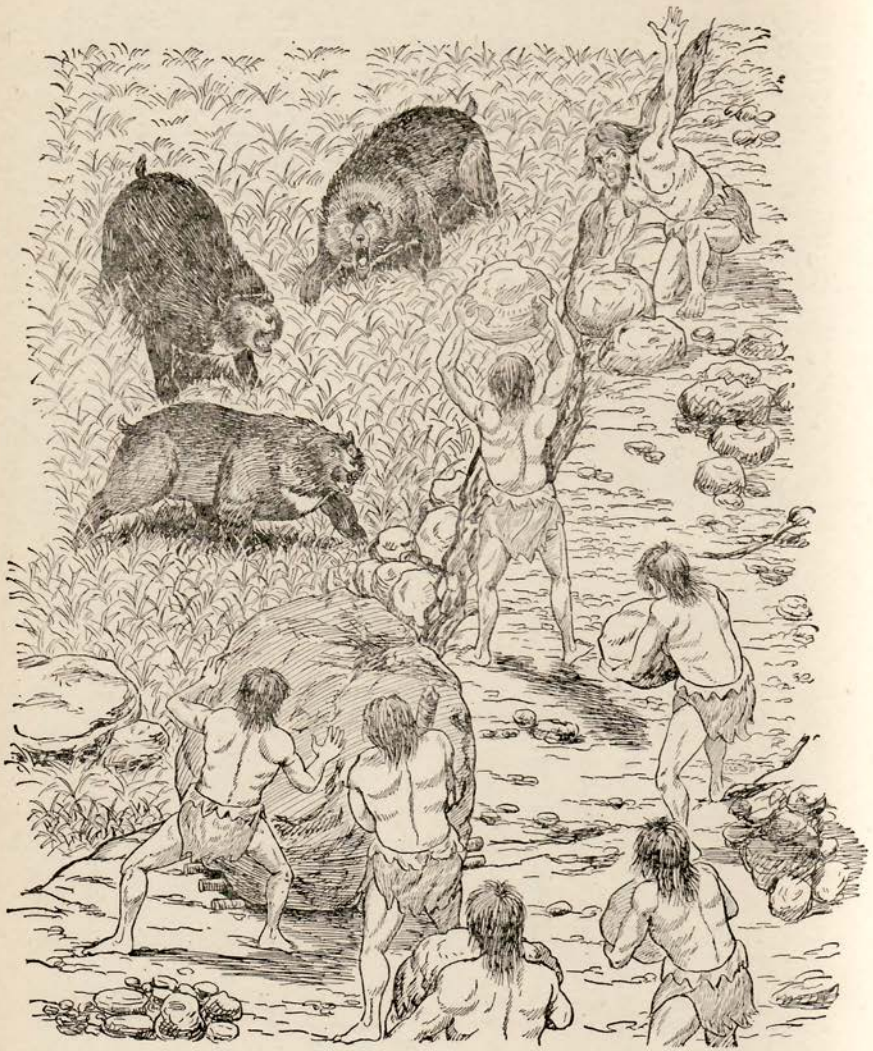
「おう、よくふとって、肉がついてるぞ。」

ばあさまは、しきりに感心しながら、

「タロよ、その水壺、こっちへとってくれ。」

といった。ばあさまは、おれが渡した水壺の中で、モグラのおなかの臓物を洗うと、

「こりゃ、料理するものの、やくとくだでな、タロ。」



春になると、地のなから青い草の芽が吹きだし、木立ちも若芽をだして、生き生きと活気づいてくる。

そうになると、人間も冬の間じゅう、家のなかに閉じこもりがちだった生活から外へとびだして、野山を駆けめぐる生活にかえる。

山にいる動物たちも、それぞれ、あなぐらや、茂みの巣から、ノコノコ顔をだして、新しい外気にふれ、夏の間にはまれて、もう一人前に



と、尻をひっぱたく音が聞こえてきた。やつはきつと、おっかあにいいつかった用事を、すっぽかしにしてきたのにちがいない。

やがて、大きな水がめを頭に乘せたおっかあの後から、すこすこ重い足を引きずって歩いていく、サブの姿が消えると、おれたちはなんだか気が抜けたように、「ふっ」と、大きなため息をついた。

「さあ、さあ、はじめよう、はじめよう。」

ジロが、みんなの気持ちをかきたてるようにしてさげんだ。ジロは、目のまわりと鼻のわきに、ベトリどろを塗りこんで、木の枝のホコをふりまわした。

おれたちは、シュロの葉っぱを腰に巻きつけ、頭にはヨシの葉っぱの鉢巻に、松葉や、コブシの花をさしてかざった人の姿をつくった。そこへ、向こうの方から、ウズメが頭に大きな壺つぼをのせてやってきた。

ウズメは、おれたちのなかまの女の子だ。男にまけないくらいあばれんほうで、おしゃべり